二人の恋

でんでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の恋

【Ｎコード】
Ｎ５１９７Ｙ

【作者名】
でんでん

【あらすじ】
新一と蘭。幼なじみ。
この関係が崩されるなんて。誰も思っていなかった。ある美少女の登場で、二人の仲は、引き裂かれていく。

初投稿です。読んでいて変なところがいっぱいあります。多分不定期な投稿になると思います。後、この設定はお互い両思いだけどつき合ってないっていう感じてす。

プロローグ（前書き）

めちゃくちゃヘンテコです（＊｀∇´）ノ
それでもいい方はどうぞ！

プロローグ

「おはよ、新一。」
「はよ」

いつも通り待ち合わせをして学校に行く。
新一と蘭にはそれが当たり前。
この当たり前が崩れることになるとは、誰も思っていなかった。

他愛のない会話をしながら歩く。蘭にとっては、それが幸せだった。

園子「蘭！おはよっ！」

学校に着くと園子が走りながらこっちにくる。

蘭「おはよ！園子。」
新一「はよ。」
新一は眠たそうに欠伸をしながら挨拶した。それを蘭は見逃さなかった。
蘭「ちょっと新一！！！！挨拶に欠伸は要らないの！！」
新一「しゃあねえだろ！昨日、事件だったんだから。」

蘭「どうせ、その後に小説でも読んでたんでしょ？この推理オタク！！！」
新一「推理オタクじゃねぇ！！」
蘭「推理オタクじゃない！！！新一が推理オタクじゃないなら、この世に推理オタクなんていないわよ！！！」

またいつもの喧嘩が始まった。それを園子がニヤニヤしながら見ている。

園子「朝から夫婦喧嘩ですか。お熱いわね。ラッブラブじゃない！！！」
新一「夫婦じゃねぇ！！」
蘭「夫婦じゃない！！」

園子の言葉に二人の顔が真っ赤になる。園子は笑いながら教室に入っていった。

プロローグ（後書き）

セリフ多いですね。
いゃ～新一と蘭も大変だ（笑）

誤字、脱字の指摘、お願いいたします（＊^^＊）

part1（前書き）

祝2回目★やったぁ～（＊'∇'）ノ

part1

しばらくしてホームルームが終わろうとしていた。

先生「今日は転校生がいるぞ～。」

先生の言葉で、クラスが途端にうるさくなる。そんな中、扉がガラッと開いた。

美夏「里山美夏です。よろしく。」

園子「美女…。」

蘭「わぁ！！！可愛い！」

クラスメイトはざわざわする。大半の男子は彼女に見とれている。もちろんこの中に新一は入っていない。そりゃ、蘭一筋なんだから。

先生「里山の席は工藤の隣だ。ほら、あそこの。」

美夏「はい。よろしくね工藤君。」

新一「あぁ…。」

ホームルームが終わるとすぐに美夏の回りに人が集まる。女子はきゃあきゃあ言っている。蘭と園子の2人もその中に加わった。

ク「どこから来たの？」

ク「彼氏いる？」

ク「何部に入るの？」

などと美夏は質問責めにあっている。美夏は困惑した様子だった。

美夏「あたし、聖徳太子じゃないから、一気に言われてもわかんないよ？」

美夏の一言で、急に質問責めが止まる。そんな中、園子が質問し始めた。

園子「美夏ちゃん…だっけ？私、鈴木園子！！！園子って呼んで！で、質問なんだけど、どっから来たの？」

美夏「美夏でいいよ。あたしは、米花女子から来たの。」

美夏が大きな声で答える。それと同時にチャイムがなった。

ｐａｒｔ１（後書き）

何かウチの小説ってセリフが多い…（／｜；）／~~

ｐａｒｔ２（前書き）

祝３回目ｄ（｜（）！
こんな駄文を読んで下ってありがとう
ございます（Ｔ＿Ｔ）
美夏目線です！！！

part2

こんちわ。里山　美夏です。昨日、帝丹高校に転校してきたの！
そこで、隣の席の工藤君に一目惚れしちゃったんだよね…♪あたし、惚れっぽいから…。
だって、あの名探偵工藤　新一だよ！？新聞で見るよりかっこいいの。

美夏「工藤君、彼女いるの？」

質問攻撃された後の授業で、あたしは聞いてみた。眠そうにこっちを見る。そんな顔にもドキッとするあたしって、バカ？まぁ、それはおいといて。質問の答えが凄く気になる。

新一「いねぇよ。」

よかった。安心の色が心の中に広がる。あたしは調子に乗って、もうひとつ質問してみた。

美夏「好きな人は？好きな人はいるの？」
新一「いるよ。泣き虫で意地っ張りで、すげぇおせっかいな奴。ほら、あっこにいる蘭だよ。知ってるだろ？」

さっきの安心の色が一気になくなる。明らかに嫉妬の色になっている。工藤君、赤くならないでよ…。
さっき工藤君が指を指した方を見る。あの娘、さっき園子といた娘だ。確か、毛利　蘭って言ったっけ。腰まで届くサラサラの長い髪、ぱっちりとしたうるうるの瞳。その上、細い手足、長いまつげ、き

れいな白肌。女の子が欲しいものばかり持ってる、あの娘。あの娘が工藤君の好きな人。羨ましいゃ。

でも、ちょっと可愛いからってあたしはあきらめない。どうにかして、あの娘を不幸にしてあげるわ。

ｐａｒｔ２（後書き）

美夏ちゃん怖いよーーー！！！自分で書いときながらだけど。

ウチに文才を分けてください（Ｔ＾Ｔ）

ｐａｒｔ３（前書き）

Ｔｈｅヘンテコ小説第４話！！！

part3

蘭は、園子と話していた。（↑主に新一の話）

園子「本当によくやるわね。お弁当だなんて、さすが奥さま。」
蘭「私は奥さまじゃないし、新一は旦那じゃない！！！」
園子「あらら…、私、旦那だなんて一言も言ってないわよ♪」
蘭「もう、園子！！！」
園子「アハハハ。あ、私日直だった！！！」

逃げるかの様に園子は屋上を出ていった。蘭かため息をついていると、後ろから声をかけられた。

美夏「毛利さん！！！」
蘭「えっ？」

振り返ると美夏が立っていた。

蘭「あ、里山さん。蘭でいいよ。どうしたの？」
美夏「あたしも美夏でいいよ♪で、ひとつ質問なんだけど…蘭さんって、工藤君のコト、好きなの？」

美夏が聞くと、蘭はみるみる赤くなっていく。それを見て、美夏は少し怒りを感じた。

蘭「違うわよっ。新一とは只の幼なじみ！！！」
美夏「ぢゃあ、あたしと工藤君の恋、手伝ってよ。」

蘭「えっ。」

美夏「お願い、どうしても手伝ってほしいの。」

新一と呼んだ蘭に完全な怒りを覚えた美夏は、蘭に恋の援助を頼んだ。蘭は困惑の色を隠せなかった。

Part3（後書き）

こんな駄文を読んでくれて、ありがとうございます（T＿T）

ｐａｒｔ４（前書き）

蘭ちゃん目線です！！！

part4

美夏「お願い。どうしても手伝ってほしいの。」

美夏ちゃんから発せられた言葉。手伝ってほしい？ムリだよ。私は美夏ちゃんが好きになるずっと前から新一が好きなんだよ？美夏ちゃん、知らないでしょ？

美夏「蘭さん。本当にお願い。」

頭を下げる美夏ちゃん。ここまで頼まれたら…って思ってしまう。でも、やっぱり新一は好きだよ。私の中に2人の私が現れて、喧嘩し始めちゃった。

蘭「いいよ。」

思わず言ってしまった。心の喧嘩では、応援しなきゃと思ってる自分が勝ったみたい。それに、新一が幸せになるならね、仕方ないじゃない。

私の言葉に美夏ちゃんは瞳を輝かせた。

美夏「本当に！？嬉しい！！！じゃあ、工藤君と喋ったり、一緒に帰ったりしないで！お願い。」

蘭「えっ？」

美夏「当然でしょ？だって、工藤君と他の女子が喋るの、見てて辛いもん。」

今日2度目の衝撃を受けた。ナンテイッタノ？でも、約束しちゃっ

たもんね。美夏ちゃんを手伝うって。

蘭「うん。わかった。」

言ってしまった、私はバカだ。

ｐａｒｔ４（後書き）

投稿遅くなってすみません（Ｔ＾Ｔ）
熱で２日間寝込みまして（ °ロ °；

Part5（前書き）

part5

次の日から、蘭は新一のことを避けはじめた。登校は一人で、愛妻弁当も作らず、喋りかけられてもすぐにどこかへ行った。しかし、それで新一が納得する訳もなく。

新一「おい、蘭どういうコトだよ!?」

蘭「何が?」

新一「‘何が?’じゃねぇよ。何で俺のコト避けてんだよ。俺、何かわりぃことしたか?」

帰ろうと荷物を持ったとき、新一に呼び止められた。ひどく新一は怒こっている。しかし、美夏と約束した手前、喋るわけにはいかない。少しの沈黙が二人の間に流れる。

蘭「私、避けてた?偶然だよ。じゃあ用事があるから先帰るね。」

一言だけ告げて、蘭は帰っていく。新一は一人取り残された。一度も後ろを振り向かないまま、蘭は去っていった。

新一「何でだよ…。」

当然の如く、偶然ではないと思ってる新一。気がつけば、蘭は門を出ようとしていた。その姿を見て、新一は昔に戻りたいと素直に思った。他愛のない会話をし、笑いあった日々。それがすべて崩れていった。

新一「くそっ。」

新一の叫び声がむなしく教室に響いた。

ｐａｒｔ５（後書き）

新一ごめんなさい（Ｔ＿Ｔ）貴方が可哀想です。
とかいって面白がってるＡｓｕです！！！

誤字脱字の指摘、よろしくお願いいたします（＊＾＾＊）

Part6（前書き）

美夏ちゃん目線です！！！

part6

一部始終、見させてもらったわよ。教室のとき。蘭さん、とってもいいこよね。工藤君と喋るなって言ったらその日から避けはじめるんだもの。本当、いい気味♪

美夏「他に何かあるかしら。あの子を痛め付ける方法♪あっ、そうだ。」

いいこと考えた。待っててね、蘭さん。今すぐ、楽しいゲームが始まるから…。

……次の日……

美夏「工藤君、蘭さんと喧嘩してるの？」

新一「あぁ、避けられてるみたいだな。」

明らかに工藤君は不機嫌。なら、計画通りに行きそうね。

美夏「じゃあ、ちゃんと話した方がいいよ。蘭さん、落ち込んでるみたいだし。」

新一「でも…。」

美夏「工藤君、カッコ悪いよ、相当。ちゃんと話しなよ。」

新一「…あぁ。」

工藤君は立ち上がって、蘭さんの元へ行った。そうして二人で屋上へと行った。もちろん、あたしは尾行してるわよ。計画通りかどうかは、ここから始まるから。

さぁ、ゲームの始まりよ。

ｐａｒｔ６（後書き）

美夏ちゃん、怖いです。普通に。さてさて、ゲームとはどんなゲームなのでしょう？

part7

蘭と新一、そして美夏は屋上にいた。（といっても美夏は尾行しているだけだが。）

新一「なぁ蘭、俺のコト、避けんなよ…。」

寂しそうな声で新一が喋り始める。蘭はゆっくりと口を開きはじめた。

蘭「避けてないって言ったじゃない。」

新一「嘘つけ。おめぇ、絶対嘘ついてるだろ。何年一緒にいると思ってるんだよ。」

蘭「嘘なんかついてないもん！！！新一は分かってない！！！」

蘭は泣きながら走り出した。新一も追いかけて走り出す。そのまま2人は、道路にとびたしていた。

パッパーーーーーー！！！

蘭「えっ？」

つんざくようなトラックのクラクションが右の方から聞こえた。蘭は新一に押され、トラックに当たらなかった。一方新一は…

蘭「新一ぃ！！！！！！！」

蘭を庇ってはねられていた。血は出ていないが、意識がない。

美夏「蘭さん！！！どうしたの？って工藤君！！！とにかく救急車を。」

美夏は冷静に救急車を呼んだ。

その後、新一は救急車で運ばれて行った。

Part7（後書き）

最後駆け足でしたね……m（__）m

part8

蘭は病院に来ていた。新一のお見舞いの為に。
あの後新一は、意識を取り戻した。あの事件以来、蘭は新一と会っていない。

美夏「あら、蘭さん。」

病室につくと、そこにいたのは美夏だった。美夏は、蘭の方を見ると、すぐに来て蘭を呼びだした。

美夏「ねぇ、蘭さん。」
蘭「何？」
美夏「何で来たの？工藤君を傷つけて、事故にまで会わせたのに。悪いと思わなかったの？」

蘭は絶句した。確かにその通りなのだ。少しずつ涙が溢れてくる。
美夏はそれを見て、ニヤリと笑った。

美夏「きっと、工藤君の傍に貴方は必要ないと思うの。だから、蘭さん。転校して？これ、工藤君からの伝言。」
蘭「……分かった。」

蘭は目に涙をためながら、転校する決意を決めた。そのまま、家に帰っていった。
そんな姿を見て、美夏はまた笑った。

美夏「ちょっと狂ったけど、最終的には成功ね。」

その笑顔は残酷な位、冷たい笑顔だった。

ｐａｒｔ８（後書き）

見た目は美少女、中身はごく悪、その名は里山美夏！！！
この子、だいっきらいなんですよ。ある女の子をモデルにしてるんですが。

part9

蘭「お父さん、お願い！！！米花女子校に転校させて！！！」

蘭は必死に頼んだ。小五郎は不思議そうな顔をしている。そりゃそうだ。急に言うんだから。

小五郎「あぁいいが……。何でだ？」

蘭「帝丹じゃダメだから…。だからお願い！！！お父さん。」

小五郎としては、転校すると聞いてビックリしたが、お願いなんてなかなかしない蘭が初めてお願いしてきたからだ。

小五郎「まぁ、お前がいいなら。」

蘭「本当？お父さん。ありがとう！！！」

結局、明後日に転校するコトになった。蘭は小五郎に誰にも言わないでと念を押しておいた。

ーーーーー3日後ーーーーー

先生「毛利が転校した。」

先生が発した一言で、クラスメイトがざわざわする。そんな中、美夏は冷たく笑った。

ｐａｒｔ１０（前書き）

園子目線です★

part10

先生「毛利が転校した。」

先生の声が痛く耳に突き刺さる。蘭が転校した？嘘でしょ？蘭、私に言わずに転校したの？何で？どうして？
いろんな質問の渦に巻き込まれていく。

よし、決めた。この後蘭の家にいく。この園子さまでも、嫌だよ。

毛利探偵事務所とでかでかと書かれたところに入っていく。中にいるのはおじ様だけだった。

小五郎「おぅ。じゃじゃ馬。何かようか？」
園子「何かようか？じゃないわよ！！！
蘭は？」

私が怒鳴るとおじ様は悲しそうな瞳をして言った。

小五郎「寮だ。あいつ、寮に入ったぞ。」
園子「高校は？高校はどこ？」
小五郎「言えないな。」
園子「！」

どうして？どうしておじ様も蘭も何も教えてくれないの？
ここにいても無駄だと悟った私は、毛利探偵事務所を後にした。

Part11（前書き）

新一目線です（＊^^＊）

part11

園子「蘭が…転校した。」

園子から言われた真実は、あまりにも残酷で。事故にあった時に出来た傷よりはるかに心の方が痛くて。

新一「嘘だろ…。」

園子「本当よ!!!そんなことで、嘘、つけない……。」

園子の目には涙が溢れていた。その様子じゃ、誰にもいってなかったらしい。いつもはすぐに働く頭も、今は全然働かない。好きな女を守り抜けないようじゃ、名探偵じゃねぇよ…。

園子「新一君、お願い。蘭を探して。お願い……。」

園子はとうとう泣き出した。

新一「……あぁ。」

名探偵の意地をかけて、何とかして蘭を探し出してやろーじゃねぇか。蘭、待ってろよ!!!

ｐａｒｔ１２（前書き）

蘭目線です（＊＾＾＊）

part12

新一、園子、本当にゴメン。
勝手に転校なんて、友達がいないなんて思ってくれていい。
でも、私新一に会わす顔がなかった。私の存在のせいで、新一を傷つけて。ひどいよね。美夏ちゃんの言う通り。

蘭「新一…。ゴメンね。新一…っ！」

お見舞いの後、いっぱい泣いた。新一に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。新一を避けた。無視した。傷つけた。罪悪感が心を締め付ける。

蘭「本当…みんな…ごめんなさい！！！」

この言葉を何度も呟いた。何度も何度も。それで吹っ切れたのか、次の日から涙を流すコトはなかった。しかし、罪悪感がなくなった訳じゃないの。
そんな罪悪感を見てみぬふりして、米花女子校へと歩き出した。

part13

蘭「こんにちは、毛利蘭です。帝丹高校から来ました。皆さん、よろしくお願いします。」

ここは米花女子高校2ーB。蘭が転校してきたクラス。いろいろな女の子が蘭に好奇の視線を向けている。

先生「毛利さんの席はあそこ。長井さんの隣よ。」

優しそうな先生が指す方を見ると、ショートカットの勝ち気そうな女の子がいた。

麗奈「よろしく。毛利さん。ウチは長井麗奈。わからないことがあったら何でも聞いて？」

蘭「うん。ありがとう、長井さん。私のことは蘭でいいよ！」

麗奈「了解！！！ウチも麗奈って読んでね♪」

麗奈とはすぐに打ち解けた。米花女子での友達1号は麗奈だった。帝丹だったら……とすぐに園子や新一のことを考えようとして、蘭は首をふった。

蘭「もう、考えちゃダメだよね……。」

蘭の一人言は誰にも聞こえなかった。

ｐａｒｔ１４（前書き）

人物紹介★

長井麗奈…ショートカットの勝ち気な女子。空手部。

小沢夏希…ポニーテールの女子。小沢財閥ご令嬢。空手部。

東原奏実…身長が小さい。髪はセミロング。関西弁の女子。空手部。

part14

麗奈「蘭、昼飯食おーぜ♪」

麗奈が大きな声で呼んでいる。その後には、小沢夏希と東原奏実がいた。夏希と奏実は、あの後、友達になった。この４人組は空手部の最強４人組である。

蘭「今行くーーー！！！」

蘭も大きい声で返す。３人とは、転校以来、ずっと一緒にいる。時々、この３人はといると、園子を思い出す。その度に、泣きそうになってみんなに迷惑をかけてしまう自分が蘭は大嫌いだった。

奏実「そういや、もうすぐ都大会やんなぁ？」
夏希「今回はトップ４をここで飾れそうだよね♪」
蘭「あぁ確かに。」
麗奈「でもやっぱり、蘭が１番でしょ？」

屋上で４人で昼御飯を食べているときに、都大会の話になった。もちろん、この中で１番強いのは蘭だ。すでに都大会を優勝しているのだから。

蘭「からかわないでよー。私が１番な訳ないでしょ？」
麗・夏・奏「「「いや、１番だから（やし。）」」」

３人に言われて、蘭は苦笑していた。

（新一がいたから…強くいれたんだよ、私…。）
また新一のことを思い出して、涙がこぼれそうになる。しかし、みんなに迷惑をかけたくなかった。

蘭「ゴメン。先、教室戻ってるね。」
夏希「え…あ、うん。」

そういい残して、蘭は1人屋上を出た。屋上の扉を閉めると涙が一筋こぼれ落ちた。

part15

時は進んで、都大会。

蘭は一回戦を始めようとしていた。ぐるりと会場を見渡す。これは蘭のクセだ。どうしても麗奈・夏希・奏実を見つけるために。５秒見渡すと、３人を見つけた。
しかし見つけたのは３にんだけじゃなかった。

蘭「新一…？」

新一の横には園子もいた。こっちを向いて、手を降ってくれている。
蘭は笑顔で答えると、試合が始まった。

蘭はどう回し回転蹴りを決め、１回戦を突破した。その後も次々と勝ち進み、優勝した。
米花女子空手部は、蘭が１位、夏希が２位、麗奈が３位、奏実が４位と快挙を成し遂げた。

蘭が他の３人と会場を出ると、新一が立っていた。

蘭「新一…。」

蘭が小さく呟くと、他の３人は驚いた。

麗奈「えっ、工藤新一？」
夏希「うそっ！」
奏実「ってか蘭、知り合いなん？」

蘭「ゴメン、質問は後で答えるから…。先に帰ってて?新一と話したいの。」

3人は顔を見合せ、黙って帰っていった。

part16

蘭「新一…？どうしているの？」
新一「おめえ、新しい学校でも空手やるだろ？だから都大会に行けば会えると思ってさ。」

三人が帰った後、蘭と新一は話始めた。

蘭「じゃなくて。私、新一にけがさせちゃったんだよ？」
新一「あれは俺の自己責任だ。」
蘭「責任感じるよ。私のせいで、大怪我までさせちゃって。」
新一「なぁ、蘭。俺が何でおめぇを助けたと思う？」

いきなりの質問に蘭は答えられなかった。思い当たる節が全くなかったのだ。蘭が頭を悩ませていると、新一が口をひらいた。

新一「おめえが好きだからだよ。」
蘭「！」

蘭は悩んだ。美夏の存在が頭を閉めていた。でもやっぱり美夏を裏切れない。

―――約束というものは怖いものだ。必ず守らなければならない。

蘭「私は、新一を幼なじみにしか見れない。」

蘭は涙をためてその場を去っていった。走った先には、美夏が笑いながらたっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5197y/

二人の恋

2012年1月14日23時54分発行